

---

# ブーギーマン

うとえ たくみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブーギーマン

### 【コード】

N6310B

### 【作者名】

うとえ たくみ

### 【あらすじ】

生徒会長の小林弥栄の視点から始まるブーギーマン。だんだんテンションあげていくつもりです。

## 小林 弥栄

7匹目の蚊を潰した時には既に約束の時間から30分が過ぎ、生徒会室の中はオレンジ色に染まっていた。

私の額には汗が滲み、座っているパイプ椅子の背もたれはジワリと汗ばんでいて、べたついて少し気持ちわるい。

室内の空気は蜂蜜のように体にまとわりつき、さらに中庭からの蝉の声が私の体温を余計に上昇させるので何もしなくても汗ばむのだ。制服のブラウスの胸ボタンを2つ外し、スカートをパタパタさせてみても、全く清涼感は得られず、むしろ暑くなったのでやめた。

本当なら窓を開け放し、爽快な空気を取り入れるところだけど、草木の生い茂る中庭に面した生徒会室でそれをやっちゃうと大量の蚊が侵入してしまうからそんなことをするわけにはいかない。

そうでなくとも、今日の昼休みに中庭でバレーボールをしてこの部屋のガラスを割ったバカのせいで、割れた箇所から蚊が侵入してくるのに。

汗ばんだパイプ椅子に座り足を投げ出したままぬるい烏龍茶のペットボトルに手を伸ばす。

タオルで汗を拭い、わずかな清涼感を求めて机に頬をくっつけてみただけ、机のひんやりとした感覚は私自身の体温ですぐに消え生ぬるいものになってしまった。

パイプ椅子から立ち上がり私は生徒会室の中をウロウロしてみる。そうすれば少しは暑さが紛れるかもと思って。

「やめろ、うっとおしい」

窓際の机で何かを書く江藤が私を見ずにそう言った。

江藤はさっきから私が暑さでダレているなか、ずっと何か書いている。

何を書いているのかは知らないけど何やら真剣そうなので放っておいた。邪魔しても悪いし。

でも、さっきの

「うっとおしい」という言葉には少しカチンときたので、私は江藤に構わず生徒会室を更にウロウロしてやった。

「あのさ、うっとおしいからやめろって」

シャーペンペンの動きを止めて私を見やる。

「うるさいなあ。いいじゃん別に。ここは私の城よ」

はあ？と言う江藤に私は続けた。

「はあ？ってあんた……。私は生徒会長よ、ということとは生徒会執行部の部長ってワケ。んで、部室は部長のもんでしょ？つまりこの生徒会室は私の城ってことよ、わかった？江藤くん」

そう言うと江藤はしばらく怪訝な目で私を見つめ、そして何事もなかったようにまた黙々と何か書き始めた。

せっかく説明してやったのに、江藤が何の反応もしないので手持ちぶさたになって少し恥ずかしくなった私は、しょうがないからまたパイプ椅子に座りバインダーをうちわ代わりに扇いでいた。

しかしいつになれば他の執行部員は集まるのだろうか？

この執行部もともと集まりが悪いのだけど、私と江藤の2人だけしか集まらないというのは今までなかった。

今日は文化祭の会議をすると聞いて来たのだがこれでは会議どころではない。

まあ、この生徒会執行部の部員はほとんど他の部活を掛け持ちしているやつらで構成されてて、みんなそれぞれの部活を優先するから会議とかバツクレられることはしょっちゅうある。

やる気がないなら辞めればいいと私は思うのだけど、生徒会という肩書きは進路に有利なもので、それ目当てに生徒会に所属しているやつらが多いのだ。

しかし例外がいて、江藤もその例外の1人。

こいつはテニス部に所属しているけど、しっかり仕事をこなしてくれるから勝手に私の右腕だと思っている。

江藤は男子と女子の両方から結構人気があるから、一般生徒に指示を出す時は江藤にやらせるとスムーズに指示が通るので便利である。部活で日に焼けた髪は少し茶色に見えるし、涙袋のある笑った顔にはあどけなさがあり、そこが女子からの人気を集める要因になっているみたい。

性格は明るくいいやつでちよつと天然なので男子からも人気高い。

「よつしや終わった!」

突然声を発した江藤は伸びをしながら体をひねっている。

「さつきから何書いてたの?」

江藤はそれを書き終わって嬉しいのか、にかつと笑い私に紙をよこした。

- - 三年四組二番江藤拓己。

僕は今日の昼休みに中庭でバレーをし生徒会室のガラスを割ってしまいました。

僕のアタックが中村くんの顔面にあたり跳ね返ったボールがガラスにあたって割ってしまいました。

今度からは中庭でアタックしないようにします。

すみませんでした。――

「ガラス割ったの江藤?」

「うん。んで反省文書けてさ、こんなん書いても反省するやつなんかいないのに」

江藤はあくびをしながら私から反省文を取った。

「さあ、会議が終わったら学年主任に見せに行こつと」

そう言うつと江藤は鞆からポッキーを取り出し袋を開けはじめる。

「小林、もしかして、うやらま?」

うらやまとは、羨ましいのことらしい。

私がポッキーを見ていたので羨ましがっていると考えたのだろう。返事をする前にポッキー手渡された。

イイ奴だ。

「まだ、始まんない？俺腹減った」

「一気に食べられるポツキーはどんどんなくなっていく。

「うん。だって人いないじゃん。」

「じゃあ先に反省文を見せて来ようかなー」

「二袋目のポツキーを口にしながら江藤は立ち上がった。

「いや、多分まだムリだと思うよ、職員会議あってるから」

それを聞いてまた座る江藤。

「ふうん。なんについての会議？文化祭」

江藤はポツキーを両手に一本ずつ持って交互に食べる。

食べ方にはバリエーションがあるらしい。

「ううん、違う。昨日ウチの生徒が変質者に襲われたらしくてね、

それについての対策会議らしいよ。『変質者対策会議』」

江藤にもらったポツキーを食べ終えた私は烏龍茶を一口飲んだ。

「はー、変質者？」

興味深そうな江藤の目は私に変質者の説明を求めている。

「うん、シヨッキングピンクのレオタード姿の中年の男でー」

そこで江藤は口からポツキーを吹き出していたが私は構わず続けた。

「シヨッキングピンクのレオタード姿でね、私キレイ？って聞いて

くるらしいよ」

いい終わると江藤はポツキーで噎せていたので私は背中叩いてや

った。

そうしていると生徒会室の引きドアが開いて、ラグビー部のユニフ

ォーム姿の男子が現れた。

「ちわー」

少しアンニューイに挨拶をした男子は今まで部活をしていたせいか額

が汗でテカテカしている。

「会議まだですか？」

坊主頭で色が黒いくアンパンマンみたいな彼はそう言って生徒会室に入ってきた。

「まだ始まつてもないし、と言いますか堀川あんた来るの遅い」  
「いやあ、と言って堀川は恥ずかしそうに俯く。

堀川は私より一個下で二年生である。  
ラグビー部顧問の竹下が生徒会の顧問でもあるので、こいつは半ば強制的に生徒会に入れられたそうだ。

それでも真面目に会議なんか出席するし仕事も速いから私は重宝している。

ただちよつと頭わるいのが玉に傷なわけなただけだ。

「あー、苦しかった、はあ」

江藤は噎せがなおり私の烏龍茶を勝手に飲んでる。

堀川がその烏龍茶を見ていると、

「ん？もしかして、瑛司うらやま？」

堀川が頷くと同時に烏龍茶を渡す江藤。

「全部やる」

江藤にそう言われて、どもつと言って堀川は残りの烏龍茶を飲みだした。

まあいいや、ぬるくなってたし。

堀川の上下に動く喉仏は烏龍茶を味わっているように見えた。

「ここ暑いつすね。窓開けていいですか？」

烏龍茶を飲み干すと空のペットボトルを机に置き、窓に向かった。

私は蚊が入るから窓を開けないように堀川に言う

「ええ？でもガラス割れたところから普通に入って来ますよ。蚊」

「いや、窓を全開にするよりはマシだつて」

窓を開けられない堀川は仕方ないのでユニフォームの上を脱ぎ、タンクトップ姿になった。

「んで会議はいつ始まるんすか？」

私は机の上の空ペットボトルを黒板横のゴミ箱にシュートしてみたけど、大きく外れてペットボトルは黒板に当たり、ばんつと音が生徒会室に響いた。

「みんなが来たら始まるよ」

私は転がったペットボトルいそいそと拾いあげ、ゴミ箱に捨てた。

「外してんじゃん」

江藤はニヤニヤしながら言ったが無視した。

「でも、これ以上は待てないから先生にどうしたらいいか聞いてくる」

「職員会議は？」

「もう終わってるよ。多分。」

江藤がふうんと黒板の上にある時計を見ると針は五時過ぎを指していた。

「勝手に帰らないでよ」

そう言い残し私は職員室へと向かった。

## 二宮 美咲

「なかなかよかったよ」

私がそう言っていると、真っ赤な顔で息を切らす男の子は恥ずかしそうに俯いた。

その仕草がなんだか可愛かったから、息の漏れる彼の唇にまたキスをする、私の顔に若い吐息がかかってくすぐりたい。

うつすらと汗ばむセーラー服の背中にはいつの間にか彼の熱い手が伸びてきたが、それをゆつくりと拒み言った。

「今日はこれでおしまいよ。君も部活あるでしょ？こんなことばかりしてちゃあ、だめだめ」

私は乱れた髪をなおし、彼の赤い頬を指で挟みひよこ口にしてみた。うーん。かわいいなあ。

彼は私を見つめ、ニコツと笑うと握り締めていた両手の掌を開いた。「また、あそぼうね」

そう言っていると彼は照れたように頷き、この男子トイレから去っていった。

図書室の下の階にあるこのトイレは放課後全く人が来ないので私はそれを利用して色んな男の子の味見をしてきた。

サッカー部やテニス部、野球部と陸上部なんかの男の子を少しだけつまみぐいしたこともある。

今日は一年生のサッカー部の男の子。

たまには年下もいいかなって気もしたし、可愛いから声を掛けたらすんなり私についてきた。

こんなに簡単について来るのは私の容姿がいいからなのだろうか。サラサラの髪にぼつてりとした唇。

別に目なんか悪くないのにオシヤレでかけてる眼鏡。

自分ではそんなにいいとは思わないけど。

一人ぼっちのトイレから出て、廊下の窓を開けるとぬるい風を伴っ

て部活動の人達の声が蝉の声と一緒に廊下に流れこんできた。それらの健全な音は私のカジュアルな男遊びを戒めるように、窓の外の世界には溢れている。

それでも茜色の風が私の身体を染め、ゆっくりと髪を撫でる。目を瞑ると人に撫でられている気がするこの感覚が好きで私はしばらくそうしていた。

少し孤高のヒロイン気分も味わったし、さて、もう帰ろうかな。

私は窓を閉めて階段を登った。廊下に溢れていた外からの音は私から遠ざかったり、私を撫でる風も窓の向こうに帰ってしまった。

中庭の見える廊下に差し掛かかり、

「生徒会室」と書かれた札を遠目に見た時、今日は生徒会の会議に出席するよう言われていたのを今さら思い出した。

でも、もう会議開始の時間から大分過ぎているし、仮にまだ会議中だとしても今から出席するのはダルいから無視して帰ることにしよう。

となれば、この廊下にある生徒会室を横切るのは得策ではない。見つかって呼び止められるのがオチである。

上の階から迂回して昇降口へ向かった方が安全だと考え、私が踵を返した時だった。

「お、二宮どこに行くんだ？」

私の存在に気づいていたようなタイミングで江藤が生徒会室の扉から顔を出して私を呼び止めた。

間の悪いやつ。

「……別に。ところで、会議もう終わったよね？」

「いや、まだ始まってすらないですからあ」

ポツキーをくわえてこちらを見ている江藤の顔が夕日に染まっているのを見ると、ああ夕方だなあと思い更に家に帰りたくなった。

「へえそうなんだ。ふうん、じゃあね」

さりげなく帰ろうとした私を江藤がまた呼び止める。

「お前どこいくの？もう少して小林来るよ」

私の気持ちを見抜いているのかどうかは分からないけど、江藤はやたらと絡んでくる。

「いやちよつと半田先生に呼ばれてて」

「ん？今日は半田先生休みだったけど。俺のクラス生物の時間は代わりに山下先生が来て、半田先生は出張だって言ってた。……美咲ちゃん。サボる気？？」

しまった。江藤め、なんで私に絡んでくるんだ。

「別に、そんな気じゃないよ」

遠くに泳ぐ私の目は江藤の視線に捕まえられてしまった。

「サボるんだ？」

ニタニタとする江藤の顔が腹立たしい。

「わかったよ、出席すればいいんでしょ。もうなんなの、あんた」

ああ、今日についてないなあ。

そう言うと江藤は生徒会室の中に引っ込み、ニヤニヤした声だけが私を呼んだ。

「とりあえずここに来い。オレら2人しかいないからつまんないし」  
ため息をつきながら茜色の廊下を歩いていると、スカートのジッパーが下がったままなのに気がついたのでジッパーを上げた。

ああ、もう少しあの子と一緒に遊んでたらよかったなあ。

## 江藤 拓己

いびつに積まれた積み木が崩れ落ちる度に俺の額がムクムクと腫れて目に涙がたまる。

二宮と堀川はジェンガを崩しまくる俺の額を微塵の容赦も慈悲もなくボールペンでデコピンするのだ。

特に二宮はボールペンを鞭のようにしならせてデコピンするから滅茶苦茶痛くて、額が陥没してしまうくらい痛くて涙目になる。

そうして俺の額が腫れば腫れるほど堀川はにこにここと笑い、俺が涙目になればなるほど二宮はサディスティックに微笑む。

「ねえ痛い？でも勝負は勝負だからゴメンねえ。じゃあ次は、三、二、一の合図でいくから」

すっかり女王様気分の二宮はさつきから額の同じ部位を集中的に狙い、ボールペンを鞭のようにしならせる。

「じゃ……いくよ。三……」

二宮の唇の右側が上がった時だった。

額に電気が流されたみたいに衝撃が走り目には涙が溢れてきた。

女王様は合図など完全に無視していきなり俺の額を打ちつけ、満足気に微笑んでおられる。

「ああごめん。手が震えて失敗した」

白々しいことを平気で言つてのけるサディスト二宮は伸びをして、ジェンガをしまい出した。

「江藤が弱すぎるからつままないよ。もう止めよ、止め」  
その言葉に堀川も頷いている。

「江藤の額打ちゲーム」に飽きてしまったのか二宮はテキパキと箱にジェンガを詰め込み、生徒会室の

「玩具ロッカー」の中へ入れた。

「小林先輩遅いっすね。俺らもしかして放置プレイされてますか？」  
堀川はそう言うと、机に頬をくっつけてぼおっとし始めた。

机にくつつけた側の頬は潰れていて、遠くを見つめるつぶらな目が倦怠感をガスみたいに醸し出している。

ジエンガをしまった二宮はさっき俺が反省文を書いていた窓際の机で真剣な顔で鏡を凝視しながら髪をいじり始める。

俺の方から見ると、二宮の眼鏡は夕日を反射して橙色に光っている。こうして生徒会室にアンニュイな空気が充満した頃、何やら廊下からドタドタと足音が聞こえてきた。

その足音は生徒会室の前で止まり、三人がドアを見やった瞬間乱暴にドアが開かれ、小林がそこには立っていた。

「今ね、先生のとこ行ってきたんだけどさあ」

帰ってくるなりそう言つと目の座った小林がゆっくりと生徒会室に入ってくる。

「今日は会議なんかしないって」

それを聞いた二宮はさっきまで凝視していた鏡を鞆にしまい帰り支度を始めるがそれは二宮によって制された。

「美咲ちゃん。ちょっと座ってて」

首を動かさず視線だけを二宮の方に向けそう言つと、小林は言葉を続けた。

「確かに会議はしなくていいんだけどね、今日は文化祭の準備をするんだって」

「何するんすかあ？」

堀川は机に頬をくつつけたままの体勢で二宮に尋ねた。

「旧生徒会室の掃除」

せつかく痛みの落ち着いた俺の額が疼きだしたのはその言葉が原因だった。

旧生徒会室は去年まで執行部が活動をしていた場所で、今の教室に引越す前の場所である。

引越した後は学校中の必要なもの以外全てがそこに集められるようになった。

その荒れ果てた学校の秘境を四人で片付けるのは

「無理」

俺がそう言つと小林は視線を右下に落とした。

「いや、正確には掃除じゃなくてね旧生徒会室からフロツピーを見つけたせばいいんだけど、たった一枚のフロツピーをあ部屋のなかから見つけ出すのは整理しながらの方が効率的かなって思つてさ」「頼に机の跡がついた堀川は眉を寄せて動かない。

二宮は深いため息をつきこめかみを指でグリグリとマッサージしながら小林に問う。

「そのフロツピーは何のために使うの？」

「去年の文化祭のデータが全部それに入ってるから、そのフロツピーがないと始まんないのよ」

「明日、みんなで探そうよ」

と俺が提案したが、

「いや、どうしても今日探すの絶対」

「なんでよ？」

と二宮

「あたしにも色々あんのよ」

黙り込む三人

「お願い手伝つて、ね！」

揺れ落ちる夕日に染まる生徒会室にはため息が充満していた。

## 柚布伊 如月

晴れ渡る青い空にはギラギラの太陽が鎮座していて、グラウンドを飛び回る青い熱風が私の顔を舐めた。

教室の効きすぎたクーラーで寒くなった身体を少し窓を開けてひなたぼっこしていら、外気と室内の温度差で気持ち悪くなった。

「柚布伊さん」

気持ち悪くなって顔をしかめる私をさつきまで大声で喋りまくっていた女子グループの一人が呼ぶ。

「クーラーつけてるからそこ閉めてくんないかな？」

「ああ、そだね。うん」

と返事をしつつ窓をぴしゃりと閉めるとさつきの女子は満足そうにありがとう、と言った。

それにしても私はどうも夏が好きになれない。

屋内にいれば効き過ぎたクーラーが体温を奪い、外に出ればヒートアイランド現象が私から水分と活力を奪っていく。

夏だからと思いついてショートにして少し後悔している髪を撫でて席に着くと、始業のチャイムが鳴った。

休み時間のざわめきは次第に薄れ、そのせいでクーラーの効きがより強まったように感じる。

次の時間は学活で授業はしないから楽なんだけど、一体何をやるのだろう。

と考えていると担任の先生が教室に入って来たので私は起立、礼と号令をかけた。

「はい、ああいいですね。みんないますね」

面倒くさそうに出席を確認したあと藤永先生はミディアムの髪を指でかきあげる。

「あー今日はですねこの時間で文化祭の話し合いをしますんでえ、ちよっと柚布伊さんいいですかあ？前に来て下さーい」

急なことに少し戸惑いつつ私が教壇まで行くと先生は続けた。

「まあ、みんなも知ってると思うんですけど三年は模擬店を出店することになってますよねえ。そんでですね、今日は三年四組は何をメニューにするかを話し合っただけなんですよ。司会は柚布伊さんでいいですねえ？じゃあどうぞ始めて下さい。」

と言うと、藤永先生は教室の扉に手をかけた。

「私いなくても大丈夫すね？この時間は私職員室にいるんでメニュー決まったら報告に来て下さい。じゃ、あと柚布井さんに頼むんで」

言い終わると同時に扉は閉まる。

話を丸投げされて、いきなり司会を任されても何をしたら良いのか分からないので教壇でマゴマゴしていると、クラスメートからポツポツと案が聞こえてきた。

とりあえずそれらの案を私が黒板に書き連ねていく速度より意見が出るスピードの方が早く、司会と言うよりかは、書記みたいな感じだ。

案にはかき氷やたこ焼き、焼きそば、クレープなどのメジャーなメニューがほとんどだった。

これで一通り意見が出揃ったようなのでこの中から多数決でメニューを決定することにした。

「じゃあ一人一回だけ手、挙げて下さい。じゃあクレープがいいひと」

17人か。

「次、焼きそばは？」

15人。

「かき氷は何人？」と私は人数をチョークの先で数える最中に1人で何回も挙手してるやつがいることに気づいた。

38人クラスだから残り6人しか手が上がらないはずなのに、14人挙げてる。

「1人1回です。聞いてました？」

と私が言つとシンと静まった空気になり、なんだか居心地悪いから  
続けて多数決を取った。

「じゃあ最後、パエリアは？」

35人拳げてる。とりあえずパエリアにメニューは決定したみたい。  
「じゃあパエリアに決定しました。異存はないですね？」

と聞いても各々近くの人と雑談をしていて反応はなかったので、模  
擬店の企画用紙のメニュー欄にパエリアと記入した。

丁度チャイムが鳴りそのままクラスは昼休みにおちた。

私は企画用紙を持ち職員室へと向かった。

廊下には我先にと食堂へダッシュしてる生徒が多くいて、何回もぶ  
つかりそうになる。

ヨロヨロとその特攻隊をなんとかかわしつつ、職員室へと辿り着い  
た。

職員室のなかはクーラーがかなり効いていて廊下との温度差が以上  
にひらいていた。

その温度差で微かに履気楼でも見えるんじゃないかと考えながら職  
員室内を見渡すと藤永先生が弁当を食べているのを発見した。

先生は私を見つけると箸を置いた。

「お疲れさま。 柚布伊さん。 んで、早速なんだけど放課後に職員室  
に来てね。」

口にもものを含み藤永先生は腰に手をやり伸びをしながら言う。

わかりました。 と言うと藤永先生はまた弁当を食べだした。

私は職員室をでて教室へと戻った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6310b/>

---

ブーギーマン

2010年10月9日00時46分発行